

文学研究とメディア論

——マクルーハンとキットラー

梅 田 拓 也

1. はじめに：2人の文学者によるメディアの「理解」

「メディア論」という領域がいつどこで始まったのかということは様々な答えがありうるが、その起源の1つにマーシャル・マクルーハン (Marshall McLuhan, 1911-1980) がいることは誰も否定できないだろう。マクルーハンは1930年代にケンブリッジ大学でアイヴァー・リチャーズに師事し、ニュー・クリティシズムの薫陶を受け、博士論文ではトーマス・ナッシュを中心とした口承詩の研究を行っていた。だが彼は1960年代に発表した『グーテンベルクの銀河系——活字人間の形成』 (*The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*, 1962) や『メディア論——人間拡張の諸相』 (*Understanding Media: The Extensions of Man*, 1964) 以降、「メディア論」の導師としてその名を馳せることになる。例えば「メディアはメッセージである」(UM 7) という格言や、「ホット／クールなメディア」(22)、あるいは「外爆発」と「内爆発」(35) といったさまざまな視座は、賛否両論を呼んだが、多くの研究者たちに影響を与え、今もなお参照され続けている¹。

マクルーハンに影響を受けて「メディア論」の看板を掲げた研究者の1人に、フリードリヒ・キットラー (Friedrich Kittler, 1943-2011) がいる。キットラーは1970年代にフライブルク大学でドイツ文学を学び、ポスト構造主義に影響を受け、博士論文ではスイスの詩人コンラート・フェルディナント・マイヤーの詩の分析を行っていた。だが彼も1980年代半ばに上梓した『書き込みシステム 1800/1900』 (*Aufschreibesysteme 1800/1900*, 1985) や『グラモフォン・フィルム・タイプライター』 (*Grammophon Film Typewriter*, 1986) 以降、文字からコンピューターまでに至る様々な技術を対象としたメディア論を発展させ、デジタルメディアを射程に入れた近年のメディア論において頻繁に参照されている。しかし彼はその『グラモフォン・フィルム・タイプライター』の序文で次のようにマクルーハンを批判していた。

マクルーハンが自著のタイトルで「メディアの理解」と言ったのだが、にもかかわらずメディアを理解することなどできない。なぜなら、逆に、その時代において支配的な情報技術があらゆる理解を遠隔操作し、あたかも理解できているという幻想をかき立てているだけだからだ。(GFT5、拙訳)

つまりキットラーは、メディアとはその時代ごとの人間の理解のあり方を決定するものであり、メディアが理解できるというマクルーハンの考えもまた、彼の時代に支配的なメディアによって生み出されたものであるというのだ。

マクルーハンとキットラー、この2人のメディア論の巨頭におけるメディアに対する態度の差異はどうして生まれたのだろうか。先行研究はこの差異を2人の「人間」への態度の違いから説明してきた (Gane 27-29; Winthrop-Young 121-122; 北田 113)。この議論の要点を次のようにまとめられる。①マクルーハンにとってメディアとは身体の拡張であり、人間の身体感覚や認識の機能という点から捉えられている。②他方キットラーにとってメディアとは情報の保存・伝送・処理のメカニズムであり、人間とは関わりなく成立するものである。③したがってキットラーにとっては、マクルーハンが人間の身体感覚や認識からメディアを理解すること自体が、メディアによって可能になったものとなる。いいかえれば、マクルーハンが人間中心主義的な議論を立てたのに対し、キットラーは非人間中心主義的なメディア論を立てたと捉えられてきたのだ。

本稿では、この人間中心主義的なメディア論／非人間中心主義的なメディア論という対立を、異なる角度から考えたい。上述したように、マクルーハンとキットラーは共に文学研究から出発した人物である。そのため2人のメディアの捉え方も、彼らの初期の文学研究に枠づけられたと考えられる。したがって先行研究では注目されてこなかったのだが、この2人のメディア論の異同も、初期の文学研究の違いから解釈できるのではないだろうか。以上をふまえ本稿では、マクルーハンとキットラーのメディア論の差異を、2人の文学研究の比較から再解釈することを図る。以下ではまず初期のマクルーハンのテキストの分析から、彼がどのような文学研究を試みていたのかを考察し、そこから彼のメディア論に何が引き継がれたかを考察する(第2節)。次に初期のキットラーのテキストの分析から、彼がどのような文学研究を試みていたのかを考察し、そこから彼のメディア論に何が引き継がれたのかを考察する(第3節)。最後に2人のたどった文学研究からメディア研究への展開を比較し、2人の理論的差異を再解釈する。

2. マクルーハンとニュー・クリティシズム

マクルーハンは、キャリアの初期においてどのような文学研究を進めていたのだろうか。またそれらの文学研究は、60年代の彼のメディア論にどのように引き継がれたのだろうか。ここでは彼の最初期の文学研究の試みを明らかにするため、学生時代に発表した「G.K. チェスタトン——実用的神話」(G. K. Chesterton: *A Practical Mystic*, 1936) と『内的風景——マクルーハンの文芸批評 1942-1963』(*The Interior Landscape: The Literary Criticism of Marshall McLuhan 1943-1962*, 1969) に収録された1940年代の批評文をみてみよう。さらにそれらの文学研究とメディア論の繋がりを見るため、メディア論への転換方針を示した『機械の花嫁——産業社会人のフォークロア』(*Mechanical Bride: Folklore of Industrial Man*, 1951) の内容をみてみよう。

1930年代から1940年代のマクルーハンは、G. K. チェスタトン、エドガー・アラン・ポー、T. S. エリオット、ジェイムズ・ジョイス、エズラ・パウンド、ジョン・ドス・パソスなど、モダニズム文学やそれに影響を与えた文学を中心に分析対象とした批評を進めていた。例えば「G. K. チェスタトン」の中では、農耕社会に由来する生命や自然を愛でる「神話」的な思考のあり方と、近代社会における合理性を称揚する「実用」的な思考のあり方という二項対立を提示する (GKC 455)。その上で彼は、チェスタトンが農耕社会的な思考のあり方を現代における「自由」の礎として捉え (456)、「近代の資本主義によって弱体化させられた文明を救出しようとしている」と称揚した (459)。また彼は「エドガー・ポーの伝統」(*Edgar Poe's Tradition*, 1944) でも、アメリカ南部の思想的伝統(カトリック、キケロニズム、文法学的神学、百科事典的、重農主義)とアメリカ北部の思想的伝統(プロテスタント、カルヴィニズム、弁論術的神学、合理主義的、重商主義)という二項対立を示す (IL 212-216)²。これをふまえ彼は、ポーの作品が南部の思想視的伝統を称揚し、北部の思想的伝統におけるカルヴィニズムや合理主義を暴くものであると位置づける (212)。これらの試みを乱暴にまとめると、マクルーハンは、実用=画一性=資本主義という現在の社会や文明のあり方を批判し、神話=多様性=農耕文明というかつてあり、ゆえにいまもありえた社会や文化のあり方を文学作品の中から読みとろうとしていると言える。いいかえれば彼は、文学を批評するという活動を通して、文学作品を現在の社会や文化の可能態として読んでいたのだ。

1950年代頃から、マクルーハンは文学批評の方法を社会批評へと転用する

ようになる。例えばエドモンド・カーペンターらと始めた雑誌『探究』での議論や、トロント大学でのエリック・ハヴェロックやハロルド・イニスやウォルター・オングらとの交流を通して、文学作品の批評を離れ、社会現象を技術から批評する「メディア論」としての性格を強めていく。これらの動きに先駆けてこの方針を示したのが『機械の花嫁』であった。彼は本書で、新聞や雑誌やラジオやテレビといった様々なマスメディアにおける広告を取り上げ、エリートが技術を介して大衆を支配するあり方を捉える重要性を訴える (MB v)。マクルーハンは、本書の試みが「芸術の分析手法を社会の批判的評価に適用する」ことであると宣言していた (vii)。さらにはこの試みによって「芸術批評は、近代国家における集合的意識に巻き込まれる中で、その全体を自覚するための牙城となる」とも述べる (vii)。この箇所を踏まえると『機械の花嫁』の試みも、上述した文学批評から現代社会の可能態を示そうとしていた最初期の試みの延長で理解することが出来る。つまりマクルーハンは、文学批評という営為に、現在の社会における支配的な秩序を客観視しそれを相対化する役割を与えようとしていたのだ。

さらに『機械の花嫁』の広告の分析方法を見ていくと、彼の文学研究とメディア論の関係がより密接なものであることが分かる。①まず、彼は広告というメディアの中で取り上げられる様々な象徴的な表現形式（セックスや死など）と心的効果の関係に注目し、それらがもたらす「幻覚と虚偽」(vii)を考察する。マクルーハンはこういった方法の前提として、芸術の「効果」ではなく、「効果」をもたらすための「手段」に注目する芸術批評の方法を示している (vii)。例えば表題にもなっている断片「機械の花嫁」の中では、広告や新聞記事の中で用いられる女性の身体表象や死体の写真に着眼し、「性と、技術と、死の表象の結びつき」が大衆に「催眠状態」をもたらしていると論じる (101)。こういった方法の前提となっているのは、マクルーハンの師でありニュー・クリティシズムの祖の1人であるアイヴァー・リチャーズの文学理論である (Fekete 149; 門林 92)。リチャーズは文学批評において、作者の個人史や社会的背景から作品を解釈するのではなく、作品の表現形式そのものが人間の知覚や認識に与える影響を科学的・客観的に論じる必要性を訴えていた。このようにマクルーハンは、文学的表現と人間の感覚の関係に注目するというリチャーズの方法を、メディアと人間の感覚の関係に注目するという方法へと転化させたのだ。②またマクルーハンは、この広告の分析にあたって、エリートたちが大衆を支配する様を「道徳的な理由から憤慨する」ことなく、エドガー・アラン・ポーの『大渦巻』で渦巻から脱出した水夫のように、「自らの状況を

観察し、理性的で超然とした態度をとり、楽しむ」ことが重要であると述べる(v)。このように価値と事実、道徳と認識を区別するという客観主義的な態度も、ジョン・クロー・ランサムらニュー・クリティシズムから引き継いだものであると指摘されている(Fekete 147)³。つまりマクルーハンは、文学の表現形式が人間の感覚に与える影響を客観主義的に記述するという議論をニュー・クリティシズムから引き継ぎ、広告というメディアが人間の感覚に与える影響を記述するという議論に発展させたのだ⁴。

このように振り返ってみると、1960年代の著作『ゲーテンベルクの銀河系』や『メディアの理解』で示される彼のメディア論の要点が、彼の初期の社会批評的文学研究において既に示されていたことがわかる。①例えばマクルーハンは『ゲーテンベルグ銀河系』の中で、合理主義的で画一的な思考のあり方と神話的で多様なあり方を対立させ、前者を「視覚的」と批判し、後者を「聴覚・触覚的」と称揚する(GG 18-21)。この合理性／多様性という図式は、チェスタトンやポーの批評の時点でも既に現れていた。②また『ゲーテンベルグ』や『メディアの理解』では、(普通の学術論文のような、目標達成や問題解決に向かって記述していく)直線的な記述を批判し、「モザイク状」のアプローチを採っている。この記述スタイルも、初期の合理主義批判を転用したものであると考えられる。③あるいは彼は、メディアを「身体の拡張」として、すなわち人間の感覚や認識に対し「スケール、ペース、パターンの変化をもたらす」ものと捉える(UM 7-8)。これも『機械の花嫁』でニュー・クリティシズムの方法から引き継ぎ、広告と人間の感覚を論じた議論が基盤となっていると考えられる。ただしマクルーハンのメディア論を初期の文学研究のみに還元することはできない。『探究』誌での議論やハヴェロックやイニスらの議論を摂取する過程で、初期の文学研究にはなかった聴覚と視覚と触覚の「感覚比率」の問題や、電子メディアの出現による「地球村」の出現といったモチーフが重視されるようになる(Fekete 156-161)。しかしメディアに着眼した社会批評という研究プログラムや、その中で示されるメディアに対する視座は、初期の文芸批評の中で獲得されたものなのである。

3. キットラーとポスト構造主義

ではキットラーはどのような文学研究を進めており、そこからメディア論に何を引き継いだのだろうか。ここではキットラーが最初期に発表した論文「われらの『自我』の幻想と文学心理学——ホフマン、フロイト、ラカン」(„Das

Phantom unseres Ichs“ und die Literaturpsychologie: Hoffmann-Freud-Lacan, 1977)
と、ポスト構造主義者としての立場を明確に示した論文集『精神科学からの精神の追放——ポスト構造主義のプログラム』(*Austreibung des Geistes aus den Geisteswissenschaften: Programme des Poststrukturalismus, 1980*) から、彼がどのような文学研究を試みていたのかを明らかにする。そして文学研究からメディア研究への転換期に書かれた「ドラキュラの遺言」(*Draculas Vermächtnis, 1980*) の内容から、彼がなぜ「メディア」に注目するようになったのかを考察する。

1970年代のキットラーは、コンラート・フェルディナント・マイヤーやゲーテ、ノヴァーリス、E. T. A. ホフマンなどドイツ文学の批評を進める中で、ラカンの精神分析とフーコーの言説分析を組み合わせた文学理論を展開していた。例えば「われらの自我の幻想と文学心理学」で彼は、ホフマンの小説『砂男』の分析に際して精神分析理論を検討していた。まずキットラーは、フロイトの議論が無意識を自我に紐付けるというある種の主体中心主義に陥っているのに対し、ラカンはそれを批判し無意識を言語のように自我と他我の間に展開する言説構造として捉えたと述べる (*PIL 150-151*)。キットラーは、文学研究がラカンの理論を踏まえることで、文学的テキストから言説構造としての無意識を導出するという研究の方向性に進むことが出来ると述べていた (*158-159*)。さらにキットラーはフーコーの議論を引用しながら、言説構造としての無意識を歴史上のある特殊な時点で発生するものとして捉えることを主張する (*160-161*)。そしてキットラーは、ホフマンの小説や、それを精神分析的に読解したフロイトの議論が、共に19世紀から20世紀にかけてのドイツにおける急速な核家族化の進行と家族制度の崩壊という歴史的背景から出現した言説であると論じた (*161*)。つまりキットラーはラカンとフーコーを組み合わせながら、文学的テキストを規定する歴史的・社会的構造を導出しようとしていたのだ (*Wellbery xxii-xxiii; Winthrop-Young 34-39*)。

なぜ彼はこのような議論を立てたのだろうか。結論から言うと、キットラーがポスト構造主義に依拠して文学的テキストの特殊性や偶有性を強調していたのは、「精神科学 (*Geisteswissenschaft*)」と呼ばれる伝統を批判するためであった。精神科学とは、広義には人間精神の所産を対象とする人文学全体を指すが、狭義にはヴィルヘルム・ディルタイやヴィルヘルム・ヴントらの思想を引き継ぐ、19世紀以来の伝統的なドイツ人文学のことを指す。これらの学的伝統はキットラーが研究者としての道を歩みはじめた1970年代においても支配的であり、文学研究や文化研究といった分野は精神科学の伝統を色濃く引き継いで

いた (Assmann 24-29)。彼は『精神科学からの精神の追放』で (タイトルの時点で既に明らかなのだが) この精神科学の伝統を批判するという方向性を明確に示している。①まずキットラーは精神科学の前提する「精神 (Geist)」、「歴史 (Geschichte)」、「人間 (Mensch)」といった概念が、普遍性を追求するヨーロッパ哲学の伝統の中で出現したと述べる (AGG 7-8)。キットラーは、精神科学の中でこれらの概念が普遍的に適用可能なものとして想定され、さらにそれが教育制度を通して再生産され続けていることを批判する。②そしてキットラーはそれらの普遍概念を批判するものとして、構造主義・ポスト構造主義を位置づける (9-10)。記号論が探求した記号の体系、精神分析が発見した無意識と狂気、人類学が記述した民俗学的事実といったものは、精神科学が前提してきた「精神」や「歴史」や「人間」という概念の普遍性を相対化している。③さらにキットラーはこの構造主義の見立てを組み合わせることで先鋭化させたのがポスト構造主義であると位置づけた (10-12)⁵。これらの見立てをキットラーは、「数学の組み合わせ論」といって、次のように図式的に説明している。「歴史」、「精神」、「人間」という3つの概念を挙げ、その3つから2つを組み合わせることで、精神科学における3つの領域が可能になる。そしてその3つの領域を批判するのが、「記号論」、「精神分析」、「人類学」という構造主義の3つの領域である。この構造主義の3つの領域から2つを組み合わせることでラカンやデリダ、フーコー、ドゥルーズ=ガタリといったポスト構造主義者の思想が展開されたと述べる (下図参照)。あまりにも図式的で妥当性の怪しい見取り図だが、当時のキットラーのポスト構造主義理解、つまり精神科学や構造主義との布置の中でそれを捉えていたことを簡潔に表すものであろう。

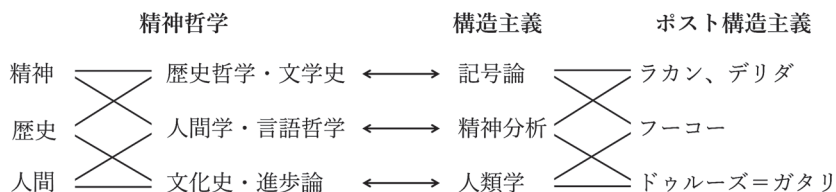


図 キットラーの考える精神科学・構造主義・ポスト構造主義の関係

キットラーは、このようなポスト構造主義思想を応用し、文学や文学批評の普遍性の想定を批判する過程で、文学や文学批評を支えるメディアに注目するようになった。例えばブラム・ストーカーの『ドラキュラ』の批評「ドラキュ

ラの遺言」を振り返ってみよう。①このテキストの冒頭で、彼はラカンの講義録『セミナー』が講義の録音の書き起こしであったことに着目し、そこに「女性的ループ」と「機械的ループ」という2つの言説生産の構造が作動していたと論じる(DV 13-15)。「女性的ループ」とは、ラカンの講義を聞いた女学生たちが彼の言葉を反復するように、話し手と聞き手の非対称的關係によって言説が産出される構造のことを指す。これに対し「機械的ループ」とは、ラカンの言葉が蓄音機によって録音されタイプライターによって書き起こされるように、記録技術によって話し手と聞き手の関係を度外視して再生産される構造を指す。つまりキットラーはラカンの議論や叙述スタイルから、19世紀末に出現した記録技術によって、「語り手」や「作者」への帰属を必要としない言説生産が可能になったことを発見している。②キットラーはこの2つの言説産出の形式を、『ドラキュラ』の2人の登場人物、主人公の妻であるミナ・ハーカーと、ミナの親友であったルーシー・ウェステンラに読み取る。ドラキュラの牙の貫入を許し自らもドラキュラと化してしまったルーシーは話し手と聞き手の非対称的關係のもとで言説を再生産する女性的ループに対応し、タイプライターなどの技術によってドラキュラ退治に貢献したミナはその女性的ループを超克する機械的ループに対応している(39)。つまりキットラーは言説を保存・伝送・処理する技術に着目することで、「言説を生み出しそれを理解する」という事態そのものが時代拘束的な事態であることを訴えているのだ⁶。作者や読者の存在を前提した伝統的な文学理解のあり方が、蓄音機やタイプライターのような記録技術の出現によって捉え直しを迫られる。

以上の議論を振り返ってみると、『グラモフォン・フィルム・タイプライター』以降で示されるキットラーのメディア論が、彼の文学研究における理論的要請から構築されたことが明らかになる。①例えばキットラーは蓄音機、映画、タイプライターという19世紀末に出現した記録メディアに特に注目したのだが、この理由をここから説明できる。ここまで見たように、キットラーは文学に普遍性や本質を探究する19世紀の精神科学を批判し、その特殊性や偶有性を強調する20世紀の構造主義を支持していた。そして彼はそのような記録メディアに着目することで、文学という営為の時代拘束性を暴こうとしたのだ。19世紀末に出現した記録メディアとは、精神科学の特殊性や偶有性を暴くものであり、構造主義の前提をなすものなのである。②また、「メディアはわれわれの状況を規定している」(GFT 3)に代表されるような、キットラーの「技術決定論」的な論調も、言説の産出という事態が歴史の中で偶然に出現したものに依存していることを示すためのパフォーマンスな戦略であると理解

すべきであろう。

4. おわりに：文学理論の変奏としてのメディア論

ここまで、マクルーハンとキットラーの2人のメディア論の差異について考察するため、2人がそれぞれどのような文学研究を進めていたのかを考察してきた。マクルーハンは、アイヴァー・リチャーズらニュー・クリティシズムの思想を受け継ぎ、文学的作品の自律性を強調し、表現形式と人間の感覚の関係に着目するという方法から出発していた。彼はこの方法を社会批評に応用し、文学や文学批評に作品の解釈という問題以上の役割を与えようとしていた。キットラーは、ミシェル・フーコーやジャック・ラカンなどポスト構造主義の思想から出発し、テキストを規定する無意識や歴史構造を重視していた。彼はこの方法を踏まえ、文学から「人間」や「歴史」や「精神」といった普遍的・本質的なものを読み取ろうとする精神科学を批判し、文学の特殊性や偶有性を暴露しようとしていた。一方はテキストの自律性に定位し、他方はコンテキストの力を強調している。一方は文学研究の応用を訴え、他方は文学研究の反省を促している。つまり文学研究者としての2人は真逆の出自を持っていたのだ。

この2人の出自の違いを踏まえて、はじめに挙げたキットラーのマクルーハン批判に立ち返ってみよう。マクルーハンはニュー・クリティシズムの文学理論を社会批評に応用する過程で、人間の感覚に関連付けてメディアを批評するというプログラムを立てた。いわば彼は、文学を読み解くようにして、メディアを「理解」しようとしたのである。他方キットラーは、19世紀以来のドイツの精神科学が人間や意味といった普遍概念を前提し世界を「理解（*verstehen*）」しようとしてきたことを批判し、構造主義を引き継ぎながら、精神科学の枠組みでは捉えられないものを指示するためにメディアに注目した。つまりキットラーにとってメディアとは、伝統的な文学研究のやり方では「理解」できないものの象徴だったのだ。先行研究（Gane 27-29; Winthrop-Young 121-122; 北田 113）は、キットラーとマクルーハンのメディア論の差異を「人間」への態度の違いとして説明してきたのだが、「メディア」の扱い方の違いも、「人間」への態度の違いも、2人の文学研究者としての問題関心や方法の差異に由来するものと捉え直すことが出来る。

ただし初期のマクルーハンとキットラーが、文学や文学批評のあり方を捉え直すという関心を共有していたことに注意しておきたい。マクルーハンは文学作品から社会の可能態を引き出すという文学批評の意義を提示しようとしてい

た。キットラーは、文学の普遍性を想定する伝統的な文学批評を批判し、文学や文学批評のあり方を反省的に捉え直そうとした。やり方も結論も全く異なっているのだが、2人にとって「メディア論」とは、「文学とは何か」や「文学批評とはどうあるべきか」という問いから出発したもののなのである。彼らを引き継ぎ「メディア」を論じる研究者たちは、極めて多様な対象（新聞やテレビから、映像機器や音響機器、あるいは様々な趣味や娯楽など）を、極めて多様な方法（人文学的なテキスト解釈から、社会科学的な量的・質的方法まで）で扱う学際的領域として展開しているが、それらの議論と文学研究との思想的関係をあまり強調しなくなってしまった。だが本稿の議論を踏まえるとメディア論を文学理論の変奏として捉え、メディア研究をそれらの問題系へと接続していく可能性が立ち現れる。少なくともその理論的支柱の1つとなってきたマクルーハンとキットラーのメディア論は、そこに照準をあてているのだ。

注

1 例文内の引用文献の内、マクルーハンとキットラーの著作に関しては略記法を採用している。略号と文献の対応については、文末の引用文献表を参照。引用部の訳は筆者による。

2 この二項対立は「現代アメリカにおける古代の論争」(*An Ancient Quarrel In Modern America*, 1946)でも示される(IL 223-234)。またマクルーハンの博士論文でも、トリヴィウム(文法学、修辞学、弁論術)における文法学と弁論術の二項対立から文学史を読み解くという視座が提示される(Fekete 151)。

3 他方、このようなマクルーハンの客観主義的な態度は、電子メディアによる救済というモチーフと相まって、「保守」という批判を招くことになった。有名なものとして、ジェイムズ・キャリーの「ハロルド・イニスとマーシャル・マクルーハン」(1967)、レイモンド・ウィリアムズの『テレヴィジョン』(1972)、ドイツの批評家ハンス・マグヌス・エンツェンスベルガーの『メディア理論のための積み木箱』(1970)が挙げられる。ここで引用したフェケテの『批評の黄昏』(1977)も、マクルーハンをアメリカのニュー・クリティシズムに位置づけた上で、彼を反動保守主義者として批判している。

4 ここでは『機械の花嫁』の内容に絞って述べたが、マクルーハンとモダニズム文学やニュー・クリティシズムの関係はより深く捉えられる。例えば門林岳史は、マクルーハンの感覚の分離と統合という議論にT. S. エリオットによる「芸術による感覚の統合」の問題の影を読みとる(門林 92-94)。また門林は前掲書の3章と4章において、マクルーハンのジョイス論を取り上げ、ジョイスにおける「意識の制止」というモチーフからマクルーハンのメディア論を再考している。

5 このような受容の仕方は、キットラーがポスト構造主義を受容した頃のドイツ

ではありえないものだった。当時のドイツではポスト構造主義の受容が進んでおらず、数少ない受容者であったマンフレート・フランクもそれを精神科学の伝統と接続していた。そのため、ポスト構造主義を精神科学に対する批判の試みとして位置づけたキットラーは、同時代の議論とは一線を画す物であったといえる (Holub 97-107)。

6 ここでは「ドラキュラの遺言」の内容に絞ってラカンとキットラーの関係に注目して述べた。だがキットラーのメディア論とポスト構造主義の関係はより広く考えなければならない。デイビッド・ウェルベリーは、キットラーが具体的な物から出発し記録という自体そのものを考察するあり方を、ラカンの記号の議論やデリダのエクリチュール論を具体化したものと捉える (Wellbery xii-xiii)。

引用文献

- Assmann, Aleida. *Einführung in die Kulturwissenschaft: Grundbegriffe, Themen, Fragestellungen*. Erich Schmidt Verlag, 2008.
- Carey, James W. "Harold Adams Innis and Marshall McLuhan." *The Antioch Review*, vol. 27, no. 1, 1967, pp. 5-39.
- Enzensberger, Hans Magnus. "Baukasten zu einer Theorie der Medien." *Kursbuch*, vol. 20, 1970, S. 159-186.
- Fekete, John. *The Critical Twilight: Explorations in the Ideology of Anglo-American Literary Theory from Eliot to McLuhan*. Routledge and Kegan Paul, 1977.
- Gane, Nicholas. "Radical post-humanism: Friedrich Kittler and the primacy of technology." *Theory, Culture & Society*, vol. 22, no. 3, 2005, pp. 25-41
- Holub, Robert. *Crossing Borders: Reception Theory, Poststructuralism, Deconstruction*. The University of Wisconsin Press, 1992.
- Kittler, Friedrich. „Das Phantom unseres Ichs‘ und die Literaturpsychologie: Hoffmann-Freud-Lacan.“ *Urszenen. Literaturwissenschaft als Diskursanalyse und Diskurskritik*, hrsg. von Friedrich Kittler und Horst Turk, Suhrkamp, 1977, S. 139-166. (PIL)
- . *Austreibung des Geistes aus den Geisteswissenschaften: Programme des Poststrukturalismus*. Schöningh, 1980. (AGG)
- . *Grammophon Film Typewriter*. Brinkmann und Bose Verlag, 1986. (GFT)
- . *Draculas Vermächtnis: Technische Schriften*. Reclam Verlag, 1993. (DV)
- McLuhan, Marshall. "G. K. Chesterton: A Practical Mystic." *The Dalhousie Review*, vol. XV, 1936, pp. 454-464, (GKC)
- . *Understanding Media: The Extensions of Man*, McGraw-Hill, 1964. (UM)
- . *The Interior Landscape: The Literary Criticism of Marshall McLuhan 1943-1962*. edited by Eugene McNamara, McGraw-Hill, 1969. (IL)
- . *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*. Routledge and Kegan Paul, 1971. (GG)
- . *Mechanical Bride: Folklore of Industrial Man*, Gingko Press, 2002. (MB)

Wellbery, David E. "Foreword." *Discourse Networks 1800/1900*, by Friedrich A. Kittler, Stanford University Press, 1990. pp. vii-xxxiii.

Williams, Raymond. *Television: Technology and Cultural Form*. Schocken Books, 1975.

Winthrop-Young, Geoffrey. *Kittler and the Media*. Polity, 2011.

門林岳史、『ホワッチャドゥーイン、マーシャル・マクルーハン？——感性論的メディア論』NTT出版、2009年。

北田暁大、「制度としての自由——フリードリヒ・キットラーのメディア論の視座」北田暁大編『自由への問い④ コミュニケーション——自由な情報空間とは何か』岩波書店、2010年、101-127頁。